

～新渡戸記念の～

『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第51回『「いたわりの理解」 ～ 傷を医す ～』

2021年4月3日(土)秩父宮ラグビー場で試合「サントリー vs クボタ」をwife、親戚、友人 6人で観戦した。今回は、息子(背広の姿)が、チームの通訳した(画像1)した。筆者にとって、ラグビー観戦は初めての経験であった。翌朝の朝日新聞の14ページにも掲載されていた。イースターの日(4月4日)はInternational Schoolでの「美しい桜花の地面」であった(画像2)。

何故か、「国手」が鮮明に蘇ってきた。国手とは「国を医する名手の意」、名医また医師の敬称とあり、「医師は直接、間接に、国家の命運を担うと思うべし」(「日本の傷を医す者」：矢内原忠雄：1945年12月23日の講演)。

- (1) 「明晰な病理学的診断」
- (2) 「冷静な外科的処置」
- (3) 「知的な内科的診療」
- (4) 「人間力のある神経内科的ケア」
- (5) 「人間の身体に起こることは、人間社会でも起こる＝がん哲学」

「いたわりの理解」である。まさに、「順境の日には喜び、逆境の日には反省せよ。」(伝道者の書7章14節)である。



1

